

けいと

見^みはらしの いい 小山^{こやま}の 上^{うえ}に、おばさま

が、小^{ちい}さな はつかねずみと いっしょにくら

していました。あるとき、おばさまは、あみも

のをする 毛糸^{けいと}が もう なくなつたので、

「ねずみちゃん、すまないけど、ふもとの町^{まち}の



糸いとやさんへ 行って、赤あかい 毛糸けいとと、白しろい 毛糸けいとと 青あおい 毛糸けいとを
かってきて くれない？」と いいました。

「あんただって、もう 三みつつに なったんだから、おつかいくらい
できるでしょう？」

ねずみちゃんは、おばさまから 金かねを もらって、山やまを 下おり
ていきました。おばさまは、おまどから、ねずみちゃんの 出でかけ
ていくのを 見みおくって、

「だいじょうぶかしら？ あの子こに、できるかしら？」と、しんぱ

いなさいました。

「もし、うまく かってきてくれたら、あの子この すきな とうもろこしを、ごほうびに やりましょう。」

こういって、とうもろこしを ふかしに かかりました。

ねずみちゃんは、どンドン 山やまを 下りおりていって、町まちの 糸いとやさ

んへ いきました。糸いとやさんとこの おじさまは、

「ねずみちゃん、いらっしやい。ひとりで、おつかいに きたの？

とてもえらいこと。」と ほめました。そして「えっ？ 毛糸けいとがい

るの？　うちには、赤い糸と白い糸はあるけど、青い毛糸は、いま、しなぎれよ。」と　いいいます。

ねずみちゃんは、おやおや、それじゃあ　だめだと　おもって、だまって　おみせを　出て　お山へ　かえろうとしました。と、おじさまは、

「ねずみちゃん、青い糸が　いるなら、となりの　町の　糸やさんへ　いってごらん。あそこなら　きっと　あるから。」と　いいました。

ねずみちゃんは、となりの 町の 糸やさんへ 行きました。と
ころが、この おじさまも、

「うちには、赤い 糸と 青い 糸は あるけど、白い 糸はい
ま しなぎれよ。」と いいます。ねずみちゃんは おやおや、こ
こも だめだと がっかりして、また お山へ かえろうとしまし
た。

「ねずみちゃん、白い 糸が いるなら——。」
と おじさまは、いいました。「もう 一つ 先の 町の 糸や

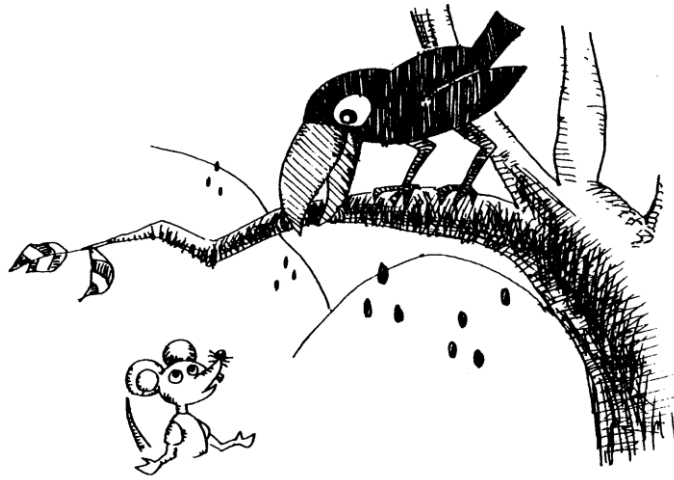
さんへ 行ってごらん。あそこなら、きっと あるから。」

ねずみちゃんは、もう 一つ 先の 町の 糸やさんまで いきました。

「うちには、白しろい 糸いとと 青あおい 糸いとは あるけど、赤あかい 糸いとは いま しましなざれよ。」

その おじさまも いいました。

「おじさま、この 先の 町にも、まだ 糸やさんは あるの？」
「いいえ、この 先は、糸やさんは、もう、一けんもないの。」



ねずみちゃんは
かなしくなつて、しくしく
なきながら
お山^{やま}
かえりました。
すると、木^きの上^{うえ}から
からすが、

「かあかあ、ねずみちゃん、なぜ
なくの？
はなして
ごらんよ、かあ。」と
いいまし
た。

「だつてさ、赤^{あか}い
糸^{いと}と
白^{しろ}い
糸^{いと}と
青^{あお}い
糸^{いと}を
かいにきたんでしよう？
だのに、は
じめの
糸^{いと}やさんには
青^{あお}い
糸^{いと}が
ない

し、そのつぎの 糸いとさんには 白しろい 糸いとが ないし、おしまいの
糸いとさんには 赤あかい 糸いとが ないんですもの。おおん、おおん。」
と ねずみちゃんは、なきなき はなしました。

「うっふ、ばかだね、ねずみちゃんは。」と からすは わらいま
した。「そんなら 三さんげんの 糸いとさんで、ある 糸いとを 一ひつつずつ
かえば、ちゃんと そろうじやないの。早はやく、そうおしよ。かあ、
かあ、かあ。」

そういつて、とんでいきました。あ、ほんとだ。ねずみちゃんは、

はじめて 気が つきました。

それで、さつきの 糸やさんへ ひきかえして、青い 糸をか
つて、もう 一けんいっの 糸やさんいとで 赤い 糸いとを かって、一ばんいち
はじめの 糸やさんいとで 白い 糸いとを かって、お山やまへ かえつてき
ました。もう すっかり 日ひが くれて、おほしさまが、ちらちら
出ていらっしやいました。

「ねずみちゃん、ねずみちゃん、もう、よるなのに、どこへ いく
の？」と、おほしさまの 一人ひとりが、おききになりました。

「いいえ、ひとりで おつかいにいって、もう かえるところなの。」

と言^いい 言^いい、ど^んど^ん お山^{やま}へ もどりました。おばさまは、

「ねずみちゃん、ねずみちゃん、おお、えらかった。」と ここに

こよろこんで、おいしい どうもろこしを くださいました。
